琉球王国交流史デジタルアーカイブ　デジタル教材

歴史資料を読み解く

テーマ　崇元寺で行われた儀式

関連資料
①『歴代宝案』校訂本 1-02-04（皇帝から故尚真王に対する諭祭文）
②『歴代宝案』訳注本 1-02-04（皇帝から故尚真王に対する諭祭文）
③『歴代宝案』訳注本 1-01-30（皇帝から故尚永王に対する諭祭文）

史料1『歴代宝案』 皇帝の、故国王尚真に対する諭祭文と祭品目録（1532年）

崇元寺*1において祭礼を行う。これはその祭文（祭礼の文書）である。（内容を）左に記す。

諭祭文

嘉靖11年（1532）壬辰　月　朔　日、皇帝が冊封正使の陳侃と副使の高澄を派遣し、琉球国中山王の尚真を諭祭させる。（皇帝）いわく、「王（尚真）は海邦（琉球）を嗣いで守ること40年余、天を敬い上（皇帝）につかえ、誠実な態度は一貫している。寿命を永くし、朕の藩屏*2となるべきであった。どうして病に罹り、突然逝ってしまったのか。訃報に接したので、心から哀悼する。官（冊封使）を派遣して諭祭し、格別の恩を示す。（尚真の霊は）知鬼があるのだから、よく喜んで従うように。　祭品

牛1頭
猪1匹
羊1匹　（以下、略）

『歴代宝案』第1集2巻4号文書より

史料2『使琉球録』（1534年）

崇元寺石門（大正14年）

超えて（六月）十六日、（先）王（尚真）を祭る礼を挙行した。（中略）寝廟（崇元寺）が一ヵ所、国門の外にある。その廟で諭祭を執行したのである。生きている者を（王に）封じ、また死んだ者を丁重に祭るということは、天下に忠を勧めるためである。諭祭礼を、冊封礼に先んじて執行するのは、（先王を）尊ぶからであり、天下に孝を勧めるためである。忠孝の道が、中国の周辺の国々で行われるならば、遠国といえども、ひとつの家なのである。（中略）

廟に到着しようとしたとき、世子（尚清）は白い布に黒い帯をしめて、門の外で迎えた。悲しげなその顔は、おごそかに喪に服している人のありさまであった。私たちは、（出迎えた世子に）揖いて*3、（門へ）入った。寝廟につくと、（先王の）神主（位牌）は東に安置されて西に向けられており、私たちは西に位置して東に向いた。竜亭*4は（廟の）中に安置されて南に向けられ、世子は南に位置して北に向いた。諭祭文が読み上げられた。（後略）

原田禹雄訳注『陳侃　使琉球録』を一部改変

解説

・『歴代宝案』は、琉球国王が諸外国と交わした外交文書を書き写した記録です。原本は沖縄戦などで失われたとされています。
・中国の皇帝から琉球の国王であることを承認してもらうことを冊封（さっぽうともいう）といいます。冊封のために中国から派遣された使節のことを冊封使といいます。
・琉球では、新しい国王が即位する前に、亡くなった前代の国王を崇元寺で弔いました（諭祭）。
→見てみよう 絵 「奉使琉球図」諭祭先王
・史料1は、諭祭で読み上げられた追悼文（諭祭文）です。控えのため、日付は記入されていません。
・史料2は、冊封使の陳侃が記した文書です。崇元寺で諭祭文が読み上げられたことがわかります。

用語

＊1　崇元寺：那覇市泊1丁目にあった寺院。歴代国王の位牌が祀られた国廟であったが、沖縄戦で焼失した。
→行ってみよう 国指定重要文化財「旧崇元寺第一門及び石垣」
＊2　藩屏：防備のための囲い。ここでは皇帝を守護する存在。
＊3　揖く：両手を胸の前で重ね合わせる礼。
＊4　竜亭：皇帝に関わるものを乗せる輿。ここでは諭祭文が乗っている。

トライ1
史料1　皇帝が冊封使を派遣して行わせたことは何でしょうか。

トライ2
史料2　新国王の即位前に前代の国王を弔う理由はなんでしょうか。

〔ねらい〕

1．文書などの文字記録、遺物、図像などの歴史資料を活用し、資料から読み取った情報の意味や意義、特色などを考察し、課題を探求したり解決したりする技能を身につける。
2．身近な歴史資料を通して琉球王国の歴史がいかに世界史と連動していたかについて学ぶ。

〔挿入写真〕

坂口総一郎 著『沖縄写真帖』第2輯，坂口総一郎，大正14. 国立国会図書館デジタルコレクション
崇元寺 https://dl.ndl.go.jp/pid/12899967（参照 2025-03-25）

〔学習活動〕

本教材では、琉球王国時代の外交文書集『歴代宝案』や、冊封使陳侃の記した『使琉球録』を通して、琉球と中国の外交の一例を身近な視点から学習し、諭祭の内容とその背景を理解する。

〔授業のポイント〕

冊封使が来琉すると、琉球ではいくつかの儀式が行われました。崇元寺で行われた「諭祭」では、皇帝から送られた追悼文（諭祭文）が読み上げられ、亡くなった前代の国王を弔いました。諭祭は前代の国王を尊ぶという忠孝の考えに基づき、一連の儀式のなかで最初に行われました。諭祭が終了したのち、首里城で冊封の儀式が行われ、新国王が正式に承認されました。このことから、琉球と中国が儒教的な価値観（ここでは忠孝の考え）に基づいて外交を行っていたことがわかります。

「奉使琉球図」諭祭先王には、長虹堤を通って那覇から訪れた冊封使一行の様子が描かれています。崇元寺の前には、諭祭文を乗せた竜亭が待機しています。

〔評価のポイント〕

下記の点が評価のポイントとなります。
・崇元寺で前代の国王を弔っていたことを読み取れたか。
・琉球と中国が儒教的な価値観に基づいた外交関係を築いていたことを理解できているか。

〔よりくわしく〕

・琉球と中国の関係は、1372年に明国の使者・楊載が来琉したことで始まります。当時、琉球は山北・中山・山南に分かれていましたが、中山王の察度が楊載の要請に答えて使者を派遣すると、山北・山南も中国へ使者を派遣し、朝貢するようになりました。察度王の子である武寧王は初めて冊封を受けました。
・崇元寺は那覇市泊1丁目にあった臨済宗の寺院です。はっきりとした創建年代は不明ですが、石門近くの下馬碑に「大明嘉靖六年」（1527年）と彫られていることから、この頃にはすでに存在したといわれています。
・戦前の崇元寺には、東西両側に下馬碑が建てられていました。同碑文には「あんしもけすもくまにてむまからおれるへし」と彫られており、歴代国王の位牌が祀られた崇元寺の前を通る際には身分の上下に関わらず下馬する必要がありました。西側の碑は破壊され、現在は東側の碑が残っています。
・戦前の崇元寺境内には、正廟（本殿）や前堂、惜字炉などの建物がありましたが、沖縄戦で焼失してしまいました。戦前に沖縄を訪れた建築史学者の田辺泰氏は、これらの建物を撮影しています。彼の著書『琉球建築大観』からは往時の崇元寺を偲ぶことができます。
＊2023年、那覇市は崇元寺の建築物を再現した模型（150分の1）と、地中に保存された遺構の原寸大模型を崇元寺公園内に設置しました。これらの模型を通して崇元寺を立体的に捉えることができます。